

おふくろ

高齢者文学人生論

井伏鱒二 (1898-1993)

『おふくろ』 (1962) 「文藝春秋」

『山椒魚』 (1929) 「文芸都市」

『厄除け詩集』 (1937) 「野田書房」

『黒い雨』 (1966) 「新潮社」

あたしやもう、えつと生きたような気がするが

井伏鱒二が随筆『おふくろ』で、「私の母は八十六歳だが、まだ割合と達者である」と書いたときの年齢は六十二歳だった。

「うちでは昔から、誰でも年が八十になる前に死んだるが、どうしてあたしだけ死なんのかしらん。あたしやもう、まわりの者に面倒かけて、まわりの者が面倒みてくれるんで生きているおるよいうなもんじゃ。あたしやもう、えつと生きたような気がするが」と言う。

えつと生きたという方言は、さんざん長生きしてしまった、もう沢山だという意味だ。八十六歳の母がそのように感じるのは無理もない。

その母からみれば、息子はいくつになっても、たよりない幼な子のような存在だ。

「お前、東京で小説を書いとるそうなが、何を見て書いとるんか」と聞き、「字を間違わんと書かんといけんが、字を間違ったら、さつぱりじやの」とさとす。

老母は、息子に甘い。「ますじに酒を飲ましてやってくれ。あんまり飲むと毒じゃから、徳利に一つだけわかせてやってくれ」と義姉に言った。飲み終わると、「お前は酒が飲めるのに、一つだけでやめることはあるまいが。飲めるのに、無理せんでもよかろうに、飲めるんじやもの、もう一つだけなら飲んでもよかろうが。よし子、もう一



おふくろ

高齢者文学人生論

つ酒をわかしてやってくれ」。

二本目で止そうとすると、またすすめられ、結局、三本、四本と飲んで行く。おふくろとはありがたいものだ。たしなめておきながら、逆に酒をすすめてくれる。

甘やかされて育った息子は酒飲みになる。『厄除け詩集』は酒飲みを美化した漢詩の超訳としてよく知られている。

勸酒 于武陵

コノサカヅキヲ受ケテクレ (勸君金屈卮)

ドウゾナミナミツガシテオクレ (満酌不須辞)

ハナニアラシノタトヘモアルゾ (花発多風雨)

「サヨナラ」ダケガ人生ダ (人生足別離)

田家春望 高適

ウチヲデテミリヤアテドモナイガ(田門何所見)

正月キブンガドコニモミエタ(春色満平蕉)

トコロガ会ヒタイヒトモナク(可嘆無知己)

アサガヤアタリデ大ザケノンダ(高陽一酒徒)

ところで、大酒飲みの文士の平均寿命は日本人の平均寿命よりもはるかに短いはずだが、不思議なことに井伏鱒二は例外的存在で、おふくろよりもえつと長生きをした。急性肺炎で逝去したのは九十五歳、酒を飲まない山椒魚の寿命に近い。

山椒魚サヨナラダケガ人生ダ